

保育者の実践知を探る質的データ分析法としての SCAT

中坪史典・加藤 望¹・肥田 武²・内田千春³
(2024年10月9日受理)

SCAT as a Qualitative Data Analysis Method to Examining the Practical Knowledges of
Early Childhood Teachers

Fuminori Nakatsubo, Nozomi Kato¹, Takeshi Hida² and Chiharu Uchida³

Abstract: The purpose of this study is to examine how the Steps for Coding and Theorization (SCAT), a qualitative data analysis method that uses generative coding, contributes to exploring the practical knowledge of early childhood teachers. The study results revealed the following three points. First, the codes generated by SCAT can accurately express the items that early childhood teachers in charge of temporary childcare are mindful of on a daily basis. Second, SCAT can uncover the deeper meaning that lies within the narratives of early childhood teachers in Japan and the United States, such as things they wanted to say but could not express well. Third, SCAT can benefit from careful close readings, appropriate interpretations, and detailed interpretations.

Key words: Early Childhood Teachers, Practical Knowledge, Qualitative Data Analysis Method, Steps for Coding and Theorization (SCAT)

キーワード：保育者、実践知、質的データ分析法、Steps for Coding and Theorization (SCAT)

1. はじめに

1-1. 保育者の実践知への注目

実践知 (practical knowledge / practical intelligence) とは、人が実践を通して獲得する知識や知性のことである (楠見, 2018)。保育者もまた、大学、短期大学、専門学校などで学んだ学問知 (academic knowledge) 以外に、日々の保育実践を通して多くの実践知を獲得しており、研究者がそれらを可視化し言語化する研究が展開されている。

例えば、野澤・井庭・天野・若林・宮田・秋田 (2017) は、保育者の実践知を可視化し共有化するための新たな

方法として「パターン・ランゲージ」を提唱する。砂上・秋田・増田・箕輪・中坪・安見 (2012) は、幼稚園における片付けについて、市販の教員研修用ビデオに対する保育者の語りを分析することで、戸外と室内という状況の違いによる保育者の実践知を明らかにする。上田・中坪・吉田・土谷 (2017) は、子どもの葛藤場面を保育者が「見守る」行為について、当事者の語りの分析から実践知の解説を試みる。及川 (2022) は、仲間関係に課題を抱える子どもに対する保育者の援助に関する実践知を明らかにする。

保育者の実践知は、暗黙知や身体知など自らの言葉で説明することが困難な知識や知性も含まれることから、研究者がこれらを解明するのは容易ではない。

1-2. 質的データ分析法としての SCAT

保育者の実践知を可視化し言語化する研究を概観す

¹名古屋学芸大学

²一宮研伸大学

³東洋大学

るとき、多くは質的データ分析法や、データ収集の手続きまで規定した質的研究法に依拠していることが分かる。例えば、既述した砂上・秋田・増田・箕輪・中坪・安見(2012)は、質的コーディング(佐藤, 2008)を、上田・中坪・吉田・土谷(2017)は、後述するSCAT(Steps for Coding and Theorization)(大谷2008, 2011, 2019)を、及川(2022)は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach)(Glaser & Strauss 1967; 戈木クレイグヒル 2006)を、それぞれ用いて保育者の語りを分析する。保育者の実践知を探る上では、質的データ分析法や質的研究法が有益であることが分かる

今日展開される質的データ分析法や質的研究法をみても、KJ法(川喜多, 1967)、うへの式質的分析法(上野・一宮・茶園, 2017; 上野, 2018)、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach)(Glaser & Strauss 1967; 戈木クレイグヒル 2006)、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach)(木下 2007)、複線径路・等至性モデリング(Trajectory Equifinality Modeling)(サトウ 2009)、多声的ビジュアル・エスノグラフィー(Tobin, 1989; Tobin, Wu, & Davidson 1989)など、特徴の異なる多様な手法が提示されている(中坪・濱名・淀澤・加藤・田島, 2019)。そのような中、本研究は、大谷(2008, 2011, 2019)が開発したSCATに注目する。

SCATは、生成的コーディング(generative coding)を用いる質的データ分析法の一つであり、「明示的で段階的分析手続きを有する」「比較的小規模のデータに適用可能である」「初学者にもきわめて着手しやすい」などの特長を有する(大谷, 2019)。インタビューの逐語録などの言語データを既定の分析表のテキスト欄にセグメントごとに入力した後、それぞれに<1> データの中の注目すべき語句、<2> それを言いかえるためのテキスト外の語句、<3> それを説明するようなテキスト外の内容、<4> そこから浮かび上がるテーマ・構成概念の順に4段階でコードを付し、さらにストーリー・ラインと理論を記述する段階的分析手続きである。手続き自体の簡明さに加え、分析者が付すコードの全てが、思い付いた経緯を痕跡として残しながら分析表上に可視化されていくことから、その都度あるいは後から遡っての、コードの妥当性の検討や修正を行いやすい点が魅力的である。

筆者らは、保育者の実践知を探る上でSCATが有益であると判断し、保育者の語りの分析を試みた。

1-3. 本研究の目的

本研究は、質的データ分析法としてのSCATが保育者の実践知を探る上でどのように寄与するのかについて検討することを目的とする。本研究は、次の点で意義があると考えられる。第一に、保育者にとどまらず、専門職と呼ばれる人々の実践知を探る上で、SCATがどのように適しているのかを示すことができる。第二に、これからSCATを用いて質的データ分析を志す初学者に向けて有益な情報を提示することができる。

本稿の執筆分担は、次の通りである。中坪史典(第1章、第3章)、加藤望(第2章)、肥田武(第1章、第4章)、内田千春(第5章)。第2章において加藤望は、SCATによって一時預かり事業を担当する保育者の実践知がどのように表出したのかを論じる。第3章において中坪史典は、文化を映し出す日本と米国の保育者の実践知を探る上で、SCATがどのように寄与したのかを論じる。第4章において肥田武は、保育者の実践知の言語化に、SCATがいかに好適であるかを、分析過程での具体的経験の例に論じる。第5章において内田千春は、本研究の成果と課題を総括する。

2. 一時預かり担当保育者の実践知をSCATで探る試み

2-1. 一時預かり担当保育者の実践知を明らかにする研究方法論と質的データ分析法の検討

一時預かり事業とは、日常的には保育施設に在籍していない場合で、家庭での保育を受けることが一時的に困難な乳幼児を預かり、必要な保護を行う子育て支援事業である(文部科学省・厚生労働省, 2019)。保育所には、日常的に通う子どもだけでなく、一時的・断続的に通う子どもとその保護者に対する子育て支援の役割も求められる(厚生労働省, 2018)。つまり、保育士資格を有する保育者にも、通常のクラス保育だけでなく、多様な保育ニーズに応じるための知識や技術も必要になる。そこで筆者は、一時預かり担当保育者が日々の実践から形成する実践知を明らかにすることを研究目的とした。

保育者の実践知を明らかにする研究方法論には、前述の多声的ビジュアル・エスノグラフィー(Multi Vocal Visual Ethnography)(Tobin, 1989; Tobin, Wu, & Davidson 1989)が援用される(e.g. 芦田・秋田・鈴木・野口・小田, 2007)。この研究方法論は、価値観、信念、実践知などの「見えないもの」を捉えるために使用されることが多い(大道・加藤・権・中坪, 2020)。その理由は、複数の視点からの対話を通じた研究方法が、物事の普遍性や真理を追究するのではなく、保育

者が為していることそのものに意味を見出すことを重視できる（ダールベリ・モス・ベンス，2022）からだろう。筆者の研究においても、実践知を明らかにすることにより、一時預かり担当保育者としての正しい保育方法を示すことや、保育をマニュアル化することを目指すのではなく、一時預かり担当保育者による保育の在り様そのものを明らかにしたいと考え、この研究方法論を援用した。

一方で、同じように多声的ビジュアル・エスノグラフィを援用している研究にも、分析方法には M-GTA を採用している先行研究（e.g. 石田，2017）もあれば、明確な分析方法を持たない、または明示されない研究もある（e.g. 林，2019）。しかし、本研究では、SCAT による質的データ分析を採用することで、実践者により言語化可能な実践知だけでなく、語りの背後にあって直接的に言語化が困難な実践知についても明らかにできると考えた。また、質的研究の試練として、客観性の担保を指摘されることがある（大谷，2019 p.63）が、SCAT では分析過程の痕跡は全て残ることから、この研究結果が決して恣意的ではないことも証明できると考えた。

2-2. SCAT を用いて分析した一時預かり担当保育者の実践知

研究の結果、一時預かり担当保育者は、通常のクラス保育を担当する保育者からは理解困難な方法で、子どもとかわっていることが明らかとなった。例えば、子どもが気に入っている物品（玩具含む）の持参とその使用の許諾や、通常の使い方とは異なるような扱い方の許容、一時的・断続的な環境でありながらみんなで一緒に活動しようとする事等である。以下、分析の結果として案出されたテーマ・構成概念を [] 内に示しながら、一時預かり担当保育者の実践知の一部を紹介する。

一時預かり事業での子ども理解には、その子どもが保育施設で安心して過ごせるための条件や興味関心がある遊びについての情報が不足し、安定した情緒で過ごせない状況があり、それをかろうじて安心できるタオルや玩具などの物的環境で補いながら [心理的安定剤の持参推奨]、情緒の安定を図ることが明らかになった [心理的安定剤としてのぬくもり代替物品]。この時、その子どもにとって夢中になれる遊びが見つければ、こうした物品は必要なくなる [ぬくもり代替物品（布製品・寝具）より魅力的な遊び] という見通しが一時預かり担当保育者にはあるので [ぬくもり代替物品（布製品・寝具）不要の見通し]、衛生環境やマナーよりも子どもの気持ちを優先してかわることができ

る [一般的マナーに対する柔軟性] [マナーより子どもの心情ファースト]。

また、日常を家庭で過ごす子どもと保育者とのかわりは、非継続・非連続的であることにより、同じことを経験しない、同じ考えを共有しない、発達の連続性が見えにくいといった課題がある [経験ギャップ] [意識ギャップ] [発達ギャップ]。また、同年代の子どもたちや保育者とみんなで一緒に活動するという経験も少ない [一時預かり通所児の集合経験の乏しさ] ために、みんなで一緒に何かしようという意識はあまりなく [一時預かり通所児の集団行動意識の低さ]、その楽しさや嬉しさを予測することもない [一時預かり通所児の面白さ受信用の低さ]。こうした状況から、一時預かり事業における保育環境は、望ましい状態を維持しようという集団意識を持つことは期待できない [日常的新入園がもたらす無秩序]。しかし一時預かり担当保育者は、だからこそ「みんな一緒に楽しい」という感覚を味わってもらいたいと考え [一時預かりでも育みたい協同性]、遊びの場面において、子どもが感じているだろう家庭と保育施設でのギャップを意識して、その隙間を埋めるような実践知を形成している（加藤，2022）。

このように一時預かり担当保育者は、一時的・断続的な子どもとのかかわりを、日々、担いながら、その子どもが過ごす、今、この時間が最善であることを試行錯誤しつつ、一時預かり事業を担っている。この研究は、これらの実践知が絶対的に正しいとか、一時預かり事業ではこうすべきだと主張するものではない。一時預かり事業を担う保育者が、実践の中で形成してきた知識や知性、その実践に至るまでの背景を明らかにして示すことで、その在り様を議論することに意義があると考えている。

2-3. SCAT が研究に寄与するもの

以上の分析結果から、一時預かり担当保育者の実践知を明らかにする上で、SCAT が寄与したのものとして、以下の三つのことが言えよう。

第一に、SCAT なら一時預かり担当保育者の実践を単純なマニュアル化とすることは避けられる。なぜなら SCAT は、収集したデータをカテゴライズしたり、予め決められているコードを付けたりする分析方法ではなく、テキストデータを読みながら適切で創造的なコードを案出して付していく生成的コーディング（generative coding）（大谷，2019 p.270）だからだ。筆者は、一時的・断続的な子どもとの関係性が繰り返される一時預かり事業において、研究者が一方的に意味を示す研究方法ではなく、保育者が生み出す知識

や知性を言語化したいと考えた。SCAT が生成的コーディングという特徴を持っていることにより、研究者の一方向的な分析や保育をマニュアル化するという研究デザインではなく、保育者が実践の中で生み出してきた実践知そのものをこの研究で導き出すことができたと考える。

第二に、SCAT はこの研究論文が学術誌に掲載されることに寄与している。実践知という必ずしも目には見えないものを明らかにしようとする場合、SCAT のように分析過程を示すことが可能な質的データ分析法であれば、研究結果の説得性を担保することが可能となる。量的研究者が質的研究の論文を読むと、得られたデータに対してどのような分析を行ったのが「不可解」だと捉えられる部分があるというのが、SCAT は定性的で明示的な分析手続きを持っていることから、量的研究の手法とも親和性が高く（大谷, 2019 p.276）受け入れられやすい。このように手続きが明示的な分析方法を採用することで、研究者自身も主観的な解釈から解放されることに加え、恣意的な研究という誤解や偏見からも解放される。

第三に、SCAT により案出されるテーマ・構成概念は、研究成果を実践者へ還元する際に、分かりやすく伝達することができる。SCAT では、名詞または名詞句としてテーマ・構成概念が案出されることで、これまで名前がつけられてこなかった状態や感情、方法や思考などの概念に名称が付与される。分析過程において、テーマ・構成概念を書くが、これには新しいことば、新しい概念を創るつもりで書く（大谷, 2019 p.294）ことが求められる。これにより、言葉で言い表すことの難しかった内容が概念化され、有益な分析概念として普及し得るとともに、今後、実践的にもそのまま普及・流通させていけるような可能性を持っていることは、開発者である大谷自身もその著書で言及している（大谷, 2019 p.294）。名詞または名詞句として案出されたテーマ・構成概念は、予め学ぶことが可能な知識としてもインパクトを与えやすい。例えば、この研究で案出した「日常的新入園がもたらす無秩序」や「マナーより子どもの心情ファースト」というテーマ・構成概念は、語呂もよく、覚えやすい上、一時預かり担当保育者が日々の保育の中で心掛けていることを標語のような形で他者へ提示できる。

3. 日本と米国の保育者の実践知を SCAT で探る試み

3-1. 文化を映し出す保育者の実践知

保育の営みは、その国の社会や文化によって作り

出される習慣、価値観、行動様式を映し出すと言う（Burke & Duncan, 2014）。Nakatsubo, Kato, Hida, Quan, He, & Uchida (2023) は、海外とは異なる日本の文化を映し出した保育のありようを描き出すことを試みている。具体的には、かえで幼稚園（広島県廿日市市）の運動会に焦点を当て、二つの5歳児クラスの子どもたちが知恵を使い、作る工夫をしながら、どちらがより高く箱を積み上げることができるかを競うクラス対抗競技の映像（大豆生田・中坪, 2016；UNESCO, 2016）を日米の保育者に視聴してもらう（日本36名／米国18名）。その上で、米国の保育者は、その映像をどう捉えるのか、共感、疑問、違和感などを語ってもらう。また、日本の保育者は、米国の保育者が抱く共感、疑問、違和感などにどう応えるのか、自らの保育の意味を語ってもらう。この映像は、運動会のクラス対抗競技という米国にはない保育であることから、語り手としての保育者には多様な感情が喚起され、自らの経験と重ね合わせた語りを示してくれる。そしてこれらの語りには、豊かな実践知が潜在する。

保育者の語りに潜む実践知を探るために私たちは、次の理由から SCAT を使用した。第一に、SCAT は、「構造」や「実存性」を扱う点で優れていることである。サトウ・春日・神崎（2019）は、「構造」－「過程」／「実存性」－「理念性」の2次元を用いて特徴の異なる質的データ分析法を分類する。その中で SCAT は、「過程」よりも「構造」を扱うこと、現象の背後にある本質的な「理念性」よりも実際に存在する「実存性」を扱うことが得意であるという。保育者の実践知は、実践を通して獲得された知識や知性の「構造」、実際に保育者の中に存在する「実存性」と親和性が高いことから、SCAT が適していると言える。

第二に、SCAT は、文脈を重視して保育者の語りに潜む意味に辿り着き、テーマ・構成概念を生成し、それらを再文脈化することで、出来事の「深層の意味の記述」（大谷, 2019）が可能となることである。SCAT における4段階のコーディングは、語りに潜む深層の意味を探る作業であり、これらを通して私たちは、保育者の実践知を掘り起こしているという実感を得ることができる。また、こうして浮かび上がった実践知が日本や米国の社会や文化によって作り出された保育者の習慣、価値観、行動様式を映し出していることをメタファーやモデルを用いて示すことができる。

3-2. SCAT を用いた分析結果

映像を視聴した米国の保育者が語った疑問、違和感の一つが「保育に競争の原理を持ち込んで良いのか」であった。これは日本の保育者の語りには見られな

かったことから、運動会で子どもたちを競争させることは、日本の保育者にとって自明であり、文化を映し出しているといえることができる。そこで私たちは、「なぜ日本の保育者は、運動会のクラス対抗競技で子どもたちを競争させるのか」という問いを立て、日米の保育者の語りを分析した (Nakatsubo, Kato, Hida, Quan, He, & Uchida, 2023)。以下、[] 内はテーマ・構成概念を示す。

分析の結果、米国の保育者は、[競争(結果としての勝敗)=文化戦争=分断という連想]を有しており、日本のように、運動会のクラス対抗競技で子どもたちを競争させてしまったら、[競争(結果としての勝敗)による子どもの分断の発生]や[子どもの怒り(他者への憤り)の発生]が見られかねない。したがって米国の保育者は、保育の中でできるだけ[競争(結果としての勝敗)の取り除き]を行おうとすることが明らかになった。

他方、日本の保育者は、米国の保育者とは対照的に[競争(結果としての勝敗)=遊び=不分断という連想]を有しており、むしろ[競争(結果としての勝敗)による子どもの協同の発生]を企図する。日本の保育者は、クラス対抗競技という[競争(結果としての勝敗)の取り入れ]を運動会で行うことで、子どもたちに対して、[敗北の悔しさによる活動の促進(思考・感情の誘発)]を期待するとともに、[敗北経験による雑草魂(負けん気と再チャレンジ精神)の獲得]や[敗北経験による集団の絆(繋ぎ止め)の物語の獲得]をめざしていることが明らかになった。したがって日本の保育者は、運動会のクラス対抗競技で子どもたちを競争させるのである。

3-3. SCAT が寄与するもの

以上の分析結果をもとに、保育者の実践知を探る上で SCAT が寄与するものとして、次の点を示すことができる。第一に、分析を通して私たちは、語り手である保育者が「言いたかったけど、うまく言えなかったようなこと」、あるいは「それは思いもしなかったし考えたこともなかったけれど、言われてみればそうだなあというようなこと」など、語り中に潜む深層の意味を掘り起こすことができたことと実感している。実際、分析結果をかえて幼稚園の保育者に確認してもらうことで、大いに納得してもらうことができた。この背後には、SCAT の特徴が関係していると言えよう。SCAT では、保育者の語り(テキスト)における表層の文脈は、<1> → <2> → <3> → <4> と書いていくにしたがって脱文脈化(de-contextualization)され、その後ストーリー・ラインの記述において、<4> ま

での分析結果が再文脈化(re-contextualization)されるといふ特徴を有する(大谷, 2019)。この作業過程こそ、既述した実感を得ることができた理由である。

第二に、SCAT では、テーマ・構成概念を案出する際にメタファーを用いることが奨励される(大谷, 2019)。私たちの分析結果では、日本の保育者が運動会のクラス対抗競技で子どもたちを競争させる理由として、[敗北経験による雑草魂(負けん気と再チャレンジ精神)の獲得]や[敗北経験による集団の絆(繋ぎ止め)の物語の獲得]をめざそうとするとした。ここで用いたテーマ・構成概念は、日本の保育者が子どもたちを競争させることの教育的意味をメタファーで表象したものである。こうした作業が日本の文化を映し出した保育のありようを描き出すことに貢献する。

4. 実践知の言語化に SCAT はなぜ適するのか——分析の具体的経験から得た私感——

SCAT によって保育者の実践知を表す適切な言葉がたぐり寄せられる。なぜか。ここでは分析で実感した、SCAT がもたらす3つの恩恵について順に説明する。

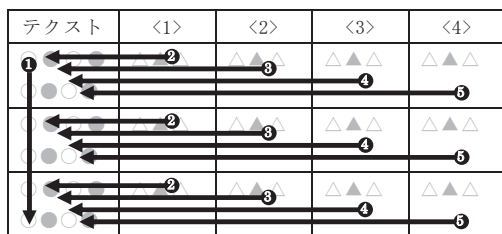
4-1. 確かな精読

精読とは、つぶさに読むこと、すなわち全てを隅々まで事細やかに読むことと一般的に理解されている。加えれば、内容の単なる理解に留まらず、熟考しながら背後にある哲学や思いをも汲み取ろうとすること、そのために行きつ戻りつしながら繰り返し読み込むことというニュアンスまで含むと言ってよいだろう。

保育者の語りを根拠に、そこに潜む(まだ明示的な言葉になっていない)実践知を研究者が言語化するためには、その語りを研究者として精読するのが誠実な方法であろう。

SCAT を実際に用いると、このことを首尾よく満たす仕組みであることが分かる。大谷(2019)は「テキストを何度も何度も十分に読み込んでから<1>を開始する」としているが、この手法でのテキストの読み込み作業は(自明であるため明言されないものの)実はまだ終わらない。と言うのも<1>～<4>の4段階のコーディングを適切にこなすために、その都度、周辺に付したコードだけでなく元のテキストまで自ずと繰り返し読むことになるからである(図1)。ましてや段階を追って分析が深まるほどに注意深い検討が必要となるため、初発の読み込み以上に丁寧で深い読みが求められるのである。

このような精読の確かな担保を、SCAT の仕組み



- ① 最初にテキストをおわりまで何度も読む
(1回目の読み)
- ② <1>を抜き出すためにテキストを読む
(2回目の読み)
- ③ <2>のコードを付すために<1>と共にテキストも読む
(3回目の読み)
- ④ <3>のコードを付すために<2><1>と共にテキストも読む
(4回目の読み)
- ⑤ <4>のコードを付すために<3><2><1>と共にテキストも読む
(5回目の読み)

図1 コーディング過程でテキストを何度も読むことになる

は内包している。最初は見落とした保育者の言い回しに後の読みで気づいて取り上げ、実践知の言語化に繋がれるといったことがしばしばある。

4-2. 解釈の適正化

生成的コーディングを伴う分析手法では、分析者自身の主体（専門性や生育歴や思想などの総体）を用いるため、ともすればテキストにそぐわない勝手な解釈が独り歩きしかねない。

しかしSCATを用いると、これを防ぐ仕組みも備わっているのだと分かる。この手法による分析は単一ページで完結する分析表の上で最初から最後まで行われる。語られたままに時系列で入力されたテキストを常に視野の左端におさめながら、それに沿ってコードを付していく。必然的にテキストの経時的な連なりや配置を考慮し、時には重要な手がかりとしながら最後まで分析を進めることになる。これはコーディングを用いる他の多くの手法が、テキストからコードをひとたび抽出できた後は、テキストを離れてコードベースの分析へと移行することとは対照的である。一旦コードを付けても最後までテキストを離れないというSCATの特徴が、前述の解釈の独り歩きを防ぐ。

図2は実例である(Nakatsubo, Hida, Uchida, & Kato, 2023)。子どもに背中を向けるという日本の保育者独特の行為に対する、米国の保育者の語り29~31の分析を<2>まで進めた際、それらをふまえて次に<3>に「日本の保育への共感」というコードをまず付した。このとき日本の優れた保育に感心してくれるはずだという先入観が分析者にはあったかもしれない。しかし後に語り70を分析しながら肝を冷やした。同じ話者が

正反対の語りをしていたのである。そこでテキスト全体を入念に再検討した結果、70<3>に「日本の保育への違和感/本音」と付し、遡って29~31<3>を「日本の保育への違和感の秘匿/建前」へと大きく修正した。これにより保育者の実践知の日米の違いが意識され、分析が発展した。

このような解釈の適正化を、テキストから最後まで離れないSCATの特徴がたびたびもたらす。

4-3. 解釈の精細化

SCATでは4段階のコーディングを終えた後、その過程をとおして最終的に練り上げられた<4>のコード群をすべて繋げることによってストーリー・ラインを書く（さらには、それを加工して理論を記述する）。このストーリー・ラインに再文脈化という機能があることは前述したが、他にも<4>のコードがきちんと揃っているかのチェックというもう1つの重要な機能がある(大谷, 2019)。これは言語化されにくいゆえにテキストの深層に埋もれたまま見落とされやすい実践知について、もれのない説明を構成するために役に立つ。

実例として中坪・肥田・加藤・内田(2022)の分析では「……米国の保育者には、(1)外発的動機付けに対する内発的動機付けの優位性の自覚の深さゆえの、(2)内発的動機付け(知りたい・創りたい等)の尊重がみられる。……いっぽう日本の保育者には、(2)外発的動機付け(勝ちたい・負けたくない)の利用がみられる。……」というストーリー・ラインをまず書いた(括弧の数字は本稿の便宜上追加した)。説明にもれがないかという観点で、これを見てすぐに気づいた。米国の保育者についての説明に対して、日本の保育者についての説明にもれがあるのである。つまり米国の側の(1)のコードと対になるような日本の側の(1)のコードが不足しているのである。例えば「……いっぽう日本の保育者には、(1)外発的動機付けに対する内発的動機付けの優位性の自覚の浅さゆえの、(2)外発的動機付け(勝ちたい・負けたくない)の利用がみられる。……」などでできればもれがなくなり、より十分な説明になる。そこでテキスト全体を再検討した結果、「順位が付かなかったら、多分、そんなところまでも頑張らない」などの埋もれていた日本の保育者の短い語りが見つかり、さらにフォローアップ・インタビューでの確認をふまえたコーディングの修正を経て、上のようにストーリー・ラインを改善できた。

SCATを用いると、このような手順で実践知に対する解釈を精細化していくことができる。

保育者の実践知を探る質的データ分析法としての SCAT

| 連番 | 語り手 | テキスト | ①テキスト中の注目すべき語句 | ②テキスト中の語句の言い換え | ③左を説明するテキスト外の概念 | ④テーマ・構成概念 | |
|----|------|--|--|---|-----------------|-----------|--|
| 29 | ジュリア | 私にとっては、子供と一緒にすることに似ていますね。おもちゃを渡して、それで彼らが何をするのか私たちが遊びを指導することなく見守る。そして、トモコは、彼女がやっていることに気づいて、彼女がやっていることと同じことをしたように思えます。彼女がやっていることを真似たのです。先生はただ後ろに立って、何が起るか観察していました。 | 私/子供と一緒にする/似ています/おもちゃを渡して/彼らが何をするのか/遊びを指導することなく見守る/トモコ/彼女がやっていることに気づいて/やっていることを真似た/先生/ただ、後ろに立って/何が起るか観察 | 米国の保育者/米国でも見られる子どもの姿/日米の共通性/子どもの言動/自主性/見守り/観察/関わり/保留/子ども同士/相互作用/真似び/字び合ひ/模範/日本の保育者/距離/背後/見守り/観察/背中向けへの言及の不在 | 日本の保育への共感 | | |
| 30 | ローラ | 私も同じことに気づきました。私たちの教室では、特に新生児が入室してきたときに、そういうことが時々起こるの。私やジュリアがやっているのは、ただ座って観察することです。そして、相手が嫌がってもあまり近づきすぎず、少し距離を置いて観察します。例えば、トモコが立っていて、友達が鍋の中の食べ物をかき混ぜるのを手伝っていたら、「スプーンを使って、鍋の中のものをかき混ぜていたね」と話しかけます。何を作っているんですか?と聞けばいいんです。私たちは、子どもたちが安心して私たちの周りにいられるように、子どもたちがしていることについて質問します。 | 私/同じことに気づき/新生児が入室してきたとき/時々起こる/ただ座って観察/相手が嫌がって/近づきすぎず/距離を置いて観察/トモコが立って/友達が鍋の中の食べ物をかき混ぜるのを手伝って/スプーンを使って、鍋の中のものをかき混ぜていたね/話しかけ/何を作っているんですか?/聞けばいい/子ども/安心して私たちの周りにいられるよう/質問 | 米国の保育者/米国でも見られる子どもの姿/日米の共通性/子どもの言動/観察/関わり/保留/距離/客観性/第3者/ナレーション/実況/言語化/クエスチョン/喋る/居場所/安心/安定/受容/背中向けへの言及の不在 | 日本の保育への共感 | | |
| 31 | ジュリア | そうですね、そうですね、私たちが床に座って、子供と同じ高さにいるイラストが好きです。というのも、あの先生は床に座っているんです。だから、私たちは常に、子どもたちと同じ目線に立つようになっているんです。それについてはそれくらいしか言えませんね。 | 私/私たち/床に座って/子供と同じ高さにいる/イラストが好き/先生/床に座って/私たち/子どもたちと同じ目線に立つようになっている/それについて/それくらいしか言えない | 米国の保育者/日米の共通性/地べた/着座/視線の高さ/視線を揃える/平行/共感/米国の保育者/視線の高さの一致/視線の高さの調整/視線の高さの整合/子ども視線への降下/トモコのエピソード/違和感なし/背中向けへの言及の不在 | 日本の保育への共感 | | |

語り 29~31 の分析でいったん付したコード（「日本の保育への共感」(上)の下線部)を、

後に登場する語り 70 の異質性* に気付いたことにより、

* 29~31 では、日本の保育者が子どもに背中を向けることについて気にも留めない様子で、その他の要素に対して肯定的に語っていただけだったが、70 では、日本の保育者が子どもに背中を向けることにあらためて言及し、先とは異なり否定的に語っている

より適切なコード（「日本の保育への違和感の秘匿」等(下)の下線部)へと大きく修正した例

| 連番 | 語り手 | テキスト | ①テキスト中の注目すべき語句 | ②テキスト中の語句の言い換え | ③左を説明するテキスト外の概念 | ④テーマ・構成概念 |
|----|------|--|---|---|------------------|-----------------------------------|
| 29 | ジュリア | 私にとっては、子供と一緒にすることに似ていますね。おもちゃを渡して、それで彼らが何をするのか私たちが遊びを指導することなく見守る。そして、トモコは、彼女がやっていることに気づいて、彼女がやっていることと同じことをしたように思えます。彼女がやっていることを真似たのです。先生はただ後ろに立って、何が起るか観察していました。 | 私/子供と一緒にする/似ています/おもちゃを渡して/彼らが何をするのか/遊びを指導することなく見守る/トモコ/彼女がやっていることに気づいて/やっていることを真似た/先生/ただ、後ろに立って/何が起るか観察 | 米国の保育者/米国でも見られる子どもの姿/日米の共通性/子どもの言動/自主性/見守り/観察/関わり/保留/子ども同士/相互作用/真似び/字び合ひ/模範/日本の保育者/距離/背後/見守り/観察/背中向けへの言及の不在 | 日本の保育への違和感の秘匿 | 日本の保育に引き寄せながらの友好的解釈/日本を否定しない配慮/建前 |
| 30 | ローラ | 私も同じことに気づきました。私たちの教室では、特に新生児が入室してきましたときに、そういうことが時々起こるの。私やジュリアがやっているのは、ただ座って観察することです。そして、相手が嫌がってもあまり近づきすぎず、少し距離を置いて観察します。例えば、トモコが立っていて、友達が鍋の中の食べ物をかき混ぜるのを手伝っていたら、「スプーンを使って、鍋の中のものをかき混ぜていたね」と話しかけます。何を作っているんですか?と聞けばいいんです。私たちは、子どもたちが安心して私たちの周りにいられるように、子どもたちがしていることについて質問します。 | 私/同じことに気づき/新生児が入室してきたとき/時々起こる/ただ座って観察/相手が嫌がって/近づきすぎず/距離を置いて観察/トモコが立って/友達が鍋の中の食べ物をかき混ぜるのを手伝って/スプーンを使って、鍋の中のものをかき混ぜていたね/話しかけ/何を作っているんですか?/聞けばいい/子ども/安心して私たちの周りにいられるよう/質問 | 米国の保育者/米国でも見られる子どもの姿/日米の共通性/子どもの言動/観察/関わり/保留/距離/客観性/第3者/ナレーション/実況/言語化/クエスチョン/喋る/居場所/安心/安定/受容/背中向けへの言及の不在 | 日本の保育への違和感の秘匿 | 日本の保育に引き寄せながらの友好的解釈/日本を否定しない配慮/建前 |
| 31 | ジュリア | そうですね、そうですね、私たちが床に座って、子供と同じ高さにいるイラストが好きです。というのも、あの先生は床に座っているんです。だから、私たちは常に、子どもたちと同じ目線に立つようになっているんです。それについてはそれくらいしか言えませんね。 | 私/私たち/床に座って/子供と同じ高さにいる/イラストが好き/先生/床に座って/私たち/子どもたちと同じ目線に立つようになっている/それについて/それくらいしか言えない | 米国の保育者/日米の共通性/地べた/着座/視線の高さ/視線を揃える/平行/共感/米国の保育者/視線の高さの一致/視線の高さの調整/視線の高さの整合/子ども視線への降下/トモコのエピソード/違和感なし/背中向けへの言及の不在 | 日本の保育への違和感の秘匿 | 日本の保育に引き寄せながらの友好的解釈/日本を否定しない配慮/建前 |
| 70 | ジュリア | 我が家には8人の幼児がいるので、状況に応じて他の子どもたちに背中が向くことはよくあります。でも、他に目を離したり観察したりする子どもがないときに、その2人の子どもだけにわざと背を向けるでしょうか?おそらくいいでしょう。前方に位置しながらも、遠く離れて観察し、話しかけたときには話しかけるかもしれません。でも、もし私がその子や子どもたちを観察することが目的で、彼らの遊びあまり干渉しないのであれば、おそらく背中を向けることはないでしょう。私なら振り返って、少し離れたところに移動します。 | 我が家/8人の幼児/状況に応じて/他の子どもたちに背中が向く/でも/他に目を離したり観察したりする子どもがないときに/その2人の子どもだけにわざと背を向ける/前方に位置しながらも/遠く離れて観察/話しかける/話しかけるかも/観察することが目的/遊びあまり干渉しないのであれば/背中を向けることはない/私/振り返って/離れたところに移動 | 米国の保育者/多人数の子ども/状況依存/場面依存/臨機応変/背中向け/消極的な背中向け/やむを得ない背中向け/迎接/他の子の不在/少人数の子どもの/（日本の保育者は）意図的な背中向け/（日本の保育者は）目を離す（日本の保育者は）喋らない/否定/日米の差異性/違和感/距離/客観的/観察/喋る/不干渉 | 日本の保育への違和感の表出/本音 | |

図2 テキストから最後まで離れず得る新たな気づきによって、既に付したコードが大きく修正されることになる

5. 総合考察

5-1. 保育者の実践知を探る上で SCAT が寄与するもの

本研究では、SCAT を活用した分析のプロセスを記述し、記述した内容についてチームとして議論し SCAT で何ができるのかを議論してきた。保育者の実践知は目に見えないものであり、保育者自身が意識化していない可能性があるものであることから、語りとして明示的に出てきにくい。しかしその深層にある意味を探り出し言語化するツールとして、少なくとも筆者らが行ってきた研究では SCAT が有効に機能してきた。

SCAT の分析では、その過程を残しているため、常に分析の過程を把握しながら分析とテキストの間を行き来しながら分析者の解釈を精細化していくことができる。さらに、脱文脈化したテーマ・構成概念や再文脈化したストーリー・ラインを実践者に戻すことで、実践者が意識していなかった実践知を取り出すことに寄与していたと言える。また、実践者が研究者の分析に対する考えを述べる際の手がかりになり解釈の適性化につながる。

5-2. 本研究の限界と課題

最後に、本研究の限界と課題を提示する。第一に、SCAT では、言葉である程度表現された内容しか分析できないため、表現がうまくできなかった語りや子どもの語りについては、本研究では議論できていない。第二に、分析者が語られていることの理解を十分にできているか、語り手を理解できているかに解釈の深さが左右される。そのため、SCAT 分析の前提となる分析者とデータとの関係について、さらに議論が必要である。

【引用文献】

- 芦田宏・秋田喜代美・鈴木正敏、・門田理世・野口隆子・小田豊 (2007) 多声的エスノグラフィー法を用いた日独保育者の保育観の比較検討：語頻度に注目した実践知の明示化を通して。教育方法学研究, 32 (0), 107-117頁
- Burke, R. & Duncan, J. (2014) *Bodies as Sites of Cultural Reflection in Early Childhood Education*. Routledge. 七木田敦・中坪史典監訳 (2017) 『文化を映し出す子どもの身体：文化人類学からみた日本とニュージーランドの幼児教育』, 福村出版
- Glaser, G. Barney & Strauss, L. Anselm (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for*

Qualitative Research. Chicago: Aldine Publishing Company. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳 (1996) 『データ対話型理論の発見：調査からいかに理論をうみだすか』, 新曜社

- グニラ・ダールベリ・ピーター・モス・アラン・ペンス・浅井幸子 (訳) (2022) 「保育の質」を超えて—「評価」のオルタナティブを探る—。ミネルヴァ書房.
- 林安希子 (2019) 幼児教育のエスノグラフィー：日本文化・社会のなかで育ちゆくこどもたち。株式会社明石書店
- 石田淳也・松延毅・中村知嗣・杉本翔平・松延摩也子・本田由衣・藤田清澄・香曾我部琢 (2017) 保育者はどのようにして散歩コースを決定しているのか—子ども理解をもとに園外環境を活用する保育者の実践知—。宮城教育大学情報処理センター研究紀要：COMMUE, (24), 31-38頁
- 加藤望 (2022) 一時預かり事業の保育者に特有の実践知：クラス担当保育者の語りとのずれに着目して。乳幼児教育学研究, 31, 51-62頁
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』, 中央公論社
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA - 実践的質的研究方』, 弘文堂
- 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説。フレーベル館
- 楠見孝 (2018) 「熟達化としての叡智—叡智知識尺度の開発と適用」, 『心理学評論』, 第61巻, 第3号, 251-271頁
- 文部科学省・厚生労働省 (2019) 一時預かり事業実施要綱。
(https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/27f4a5b4-53c9-446d-ab3d-7c7055949a26/f1d67b3d/20230929_policies_kokoseido_law_tsuuchi_tsuuchi-h24-h29_547_0.pdf 2024/8/9情報取得)
- 中坪史典・濱名潔・淀澤真帆・加藤望・田嶋美帆 (2019) 「質的データ分析法としての SCAT とうえの式質的分析方の比較—幼稚園長のインタビューデータから」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要第三部 (教育人間科学関連領域)』, 第68号, 9-18頁
- 中坪史典・肥田武・加藤望・内田千春 (2022) 「なぜ保育者は運動会の「クラス対抗競技」で子どもたちを競争させるのか?—ある幼稚園の事例から」, 『日本教育学会第81回発表要旨』, 188-189頁
- Nakatsubo, F., Kato, N., Hida, T., Quan, H., He, J., & Uchida, C. (2023). Why Do the Japanese Early Childhood Teachers Give Young Children Compete in the “Sports Day”? Focusing on the

- Case of Class Competition. *Twenty First Annual Hawaii International Conference on Education*, 80
 Nakatsubo, F., Hida, T., Uchida, C. & Kato, N. (2023). How Do Nursery Teachers in the US View a Japanese Nursery Teacher Who Use Her Back to Interact with Infants and Toddlers?: Focusing on the Case of Class Competition. *Twenty First Annual Hawaii International Conference on Education*, 80.
- 野澤祥子・井庭崇・天野美和子・若林陽子・宮田まり子・秋田喜代美 (2017) 「保育者の実践知を可視化・共有化する方法としての「パターン・ランゲージ」の可能性」, 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 第57巻, 419-449頁
- 及川智博 (2022) 「仲間関係の変容を促す保育者の援助の実践知：“ひとりぼっちの幼児”と“親密すぎる二者関係”を題材とした仮説モデルの生成」, 『教育心理学研究』, 第70巻, 48-66頁
- 大豆生田啓友・中坪史典 (2016) 『映像で見る主体的な遊びで育つ子ども－あそんでほくらは人間になる－』, エイデル研究所
- 大道香織・加藤藤子・榎赫虹・中坪史典 (2020) 研究方法論としての多声的ビジュアル・エスノグラフィーの可能性と課題, 『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」』 第1号, 213-220頁
- 大谷尚 (2008) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案－着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」, 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』, 第54巻, 第2号, 27-44頁
- 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization - 明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法-」, 『感性工学』, 第10巻, 第3号, 155-160頁
- 大谷尚 (2019) 『質的研究の考え方－研究方法論から SCAT による分析まで-』, 名古屋大学出版会
- 戈木クレイグヒル滋子 (2006) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ－理論を生み出すまで-』, 新曜社
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法－原理・方法・実践-』, 新曜社
- サトウタツヤ編 (2009) 『TEMではじめる質的研究法－時間とプロセスを扱う研究をめざして-』, 新曜社
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (2019) 『質的研究法マッピング－特徴をつかみ, 活用するために-』, 新曜社
- 砂上史子・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・中坪史典・安見克夫 (2012) 「幼稚園の片付けにおける実践知：戸外と室内の片付け場面に対する語りの比較」, 『発達心理学研究』, 第23巻, 第3号, 252-263頁
- Tobin, J. (1989). Visual anthropology and multivocal ethnography: A dialogical approach to Japanese preschool class size. *Dialectical Anthropology*, 13, 173-187.
- Tobin, J., Wu, D., & Davidson, D. (1989). *Preschool in Three Cultures: Japan, China, and the United States*. New Haven: Yale University Press.
- 上田敏丈・中坪史典・吉田貴子・土谷香菜子 (2017) 「実践知としての保育者の「見守る」行為を解読する試み－当事者の語りに着目して-」, 『子ども学』, 第5号, 萌文書林, 223-239頁,
- 上野千鶴子監修・一宮茂子・茶園敏美編 (2017) 「語りの分析〈すぐに使える〉うへの式質的分析法の実践」, 『生存学研究センター報告』, 27, 立命館大学生存学研究センター
- 上野千鶴子 (2018) 『情報生産者になる』, ちくま新書
- UNESCO (United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization). (2016). Play makes us human (Japan). <https://www.youtube.com/watch?v=xvRywZr0V4A>.

【付記】

本稿は、2023年12月10日に開催された日本乳幼児教育学会第33回大会自主シンポジウムでの話題提供がもとになっている。また、本研究は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 (B) 「日米中の保育者の多様な声に基づく「文化的営みとしての保育」概念の構築」(研究代表者:中坪史典) (23K20692) の助成を受けて実施したものである。